

バルナバ栄一の「聖書談話」⑤ (マルコによる福音書 1 ; 14 ~ 34)

ガリラヤで伝道を始める (マタイ 4 ; 12 ~ 17 ルカ 4 ; 14 ~ 15)

14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて、15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と云われた。

4人の漁師を弟子にする (マタイ 4 ; 18 ~ 22 ルカ 5 ; 1 ~ 11)

16 イエスは、ガリラヤ子のほりを歩いておられた時、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師だった。17 イエスは『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた、18 ふたりはすぐに網を棄てて従った。19 また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手当てをしているのをご覧になると、20 すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

汚れた霊に取りつかれた男をいやす。 (ルカ 4 13 1 ~ 37)

一行はカファルナウムに着いた。イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。22 人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。23 その時、この会堂に汚れた霊を持つ男がいて叫んだ。24 「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」。25 イエスは「黙れ。この人から出てゆけ。」とお叱りになると、26 汚れた霊はその人に痙攣を起こさせ、大声をあげて出て行った。27 人々は皆驚いて、論じ合った。「これは一体どういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が、汚れた霊に命じると、その云う事を聞く」。28 イエスの評判は、たちまち、ガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

多くの病人をいやす (マタイ 8 ; 14 ~ 17 ・ルカ 4 ; 38 ~ 41)

29. すぐに一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。30 シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女の事をイエスに話した。31 イエスはそのそばに行き、手をとって起こされると、熱は去り、彼女は一行をもてなした。32、夕方になって日が沈むと、人々は病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れてきた。33 町中の人々が戸口に集まった。34 イエスは、色々な病気にかかっている大勢に者達をいやし、また多くの悪霊を追い出して、悪霊に、ものを云う事をお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

15節「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じない

今日からは、割合スムーズに聖書を読んで行けると思っていたのですが、そういう訳にいかない事に気づきました。何故なら、イエス様が生涯で一番重要な言葉を発しておら

れる聖書の箇所だからです。「時は満ち」とはどんな意味でしょうか。神様が約束なさったイスラエルの平和（やがて世界の平和になって行くのですが）、その「キリストの平和」が完成に向かう時が来たよ、待望の時は過ぎ、その時が来たんだ、第二イザヤが予言したあの平和の時が、とっておられるのです。

いかに美しいことか、 山々を歩き巡り、 よき知らせを伝える者の足は。
彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え、 救いをつけ、
あなたの神は王となられた、と シオンに向かって呼ばれる。
その声に、あなたの見張りは声を上げ、皆 共に、喜び歌う・・・・・・・・

(イザヤ52；7～8)

平和の時とは何か？。終わりの時、神の国が完成する時ですね。「神の国」とは、私たちの考えている、日本とかアメリカとか、国の領域ではありません。神様の支配の事です。

「神の国」・・イエスは何か新しい思想や信仰の事を宣べ伝えられたのではないのです。神が私たちとの交わりを回復してくださって「王として支配される現実」を、イエスの生き方を通して示し、神の国はご自分の中に、イエスの中に来ていると宣言されたのです。予言としてのイスラエルの歴史、その実現・成就としてのイエスの出現と生活、特にイエスの十字架の死と復活によって主イエスの生涯全体が世界の為の神の救い「神の支配」（神の国）を成就していると宣言されたのです。イエスのその宣教を通して、イエスが既に来られたから神の国は既に来ているという面は勿論あるのですが、裁きがまだ終わっていないから完全な神の支配はまだであるとも考えられるのです。神の国は既に来たけれども、完成するのは未来です。その緊張と矛盾の中に私たちはまだいます。だから「主よ、来たり給え」と言う再臨待望・平和待望への祈りが当然あるべきなのです。

実はイスラエルの民達は、イエス出現の前頃から二重の意味で「メシア待望」＝「神のご支配」を待望していました。一つはローマを初めとする外国からの支配を脱したいと言う希望、一つは律法宗教の呪縛からの解放（つまり律法世界に生きる事が出来ないという差別世界に属している貧しい人々がいること）。神の支配はそれらの解放を実現するものですから、良い知らせ（福音）であり、悔い改めて神様の方を振り向いて信じさえすれば救われるのですから、当時のイスラエルに対して、今イエスを通して「神の支配に身を任せなさい」とおられるのです。さて神の支配に身を任せるとは、神様にそっぽを向くことではありません。神の方に向く、常に注意を向ける事です。それが「悔い改める」と云うことです。そして「福音を信ぜよ」、「神の国」と言う終末がイエスの中に来ていること、つまり私たちの救いが今や「イエスを信じる」と言う目の前の事になっている、その事を信ぜよ、と私たちに云っておられるのです。何故イエスは、バプテスマのヨハネが行ったガリラヤで伝道し始められたか。ヨハネが関係したガリラヤの領主ヘロデと王妃ヘロデヤとの問題は、マルコ6章14節を読めば分かります。イエスはその領主ヘロデの権威に反抗する為にガリラヤに行かれたわけではありません。ガリラヤがイエスの故郷だからと言うわけでもありません。故郷であるガリラヤはイエスを容れなかったのです。しかし、まさにここ、ガリラヤで、ヨハネを超えて、根本的に「福音」を宣べ始められたのです。神を信じる事の本質は、「わたしについて来ること

だ」と宣言されたのです。

四人の漁師を弟子にする箇所で見がつくのは、この四人は漁師であって学識もなく、綿密な思考力にも乏しく、どちらかと云うと粗雑な、然しそれだけに素直な所がとりえの人々だったと云うことです。然しシモン・ペテロのように既に一家をなして生計を立てねばならぬ人、またヤコブとその兄弟ヨハネのように父と共に働いていた人が父を顧みずに、すぐに、イエスの後ろについて行ったと言う事が、腑に落ちませんでした。でも彼らは召されたのです。勿論イエスの権威と魅力には抵抗できなかったのでしょう。現在の或る研究者はこう語っています。福音記者マルコは、救い主・復活者キリストの働きを見ているのだと。イエスの復活後とこの召命の時が二重写しになっているから、「すぐ」を使ったのは当然だと。人間のなす業なら、熟慮断行という言葉が使われるべきですが、主からの召命の呼びかけには、召される事が恵みであるばかりか、答えることも恵みだからです。意味は後から分かってくるのです。この解説（渡辺信夫師著「マルコ福音書講解」）を読んで、私は過去の行動の一つを、肯定する事が出来るようになりました。私が小児科教室で6年間の小児科医師としての訓練を受け、医療に携わる力を頂きながら、乳児院への就職を選んだ事は、召命を自分で選んだ・・・神様からの召命であるかどうかを考えることなく・・・と後で悔やんでいたのはいらぬ事で、私が教授の質問に間髪をいれず、国立岡山病院小児科医長を棄てて、「乳児院へ行く」答えたのは、召命の主が現実に傍らに立って呼びかけて下さっていたのだ、と受け取れるようになって来ました。これは私の今の感想です。

ついでに、当時の会堂はユダヤ教徒の宗教生活の中心であっただけではなく、律法の研究機関であり、子どもの学校であり、地方の民事裁判や刑事裁判を行い、民衆に律法を教える所であったのです。そのようにしてユダヤ教は基礎を作っていたのです。その作られた集会でイエスは、民衆に出会われたのです。そして、民衆の魂の内的経験が積み重ねられてゆくのです。

イエスはカファルナウムで宣教し始められました。何処に根拠を定められたか、よく分かっていないが、恐らくシモン・ペテロの家が根拠地になったのであろうという意見が多い。最初の会堂での説教がすむと、ペテロは自分の家にイエスを連れてきた。でも姑が熱を出して寝ていた。勿論イエスは言葉だけで直せるのですが、神様がそこにいらっしやって、その恵みが皆の目に見えるように、姑の手をとって起こされるのです。熱が去り、癒された姑はいそいそと、イエスを始め一同をもてなす奉仕を始める。何時でも、何処でも、女性の奉仕が集会を成り立たせるのですね。

安息日は勿論夕方まで、人々は仕事をする事を律法で禁じられている。人間を運ぶ事も、その仕事に数えられているから、夕方になってやっと人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を、イエスのもとに連れてゆく事が出来るようになります。イエスはすべての患者達を癒し、悪霊を追い出し、その悪霊に「神の聖者だ」と言う告白をさせられない。このことは「微行＝インコグニト又は『メシアの秘密』」と言われているが、マルコ福音書の後の所で触れます。それにしてもイエスの働きは、最初から最後まで休まる時がな

い。私達も夢中で人や教会の集会の為に働いている時には、何処からか力を頂くのである。その疲れの中でイエスは、神に祈り力を頂かれる。その時は朝早くしかない。やがて群衆に起こされたシモンや他の弟子たちがイエスを探しに来てイエスを求める民達の所に、つれ帰ろうとします。人間は結局、神の力をも自分たちの願望に役立たせたいのです。ところがそのような人間の願望にイエスの使命は対立します。「福音を宣べ伝える」と言う行為が、救いとしての最重要なモチーフだからです。人が救われる為には、それを聴いて信じる事が、直ちに救いとなるような言葉が必要なのです。「主の名を呼び求める者はすべて救われる」のですが、「然し信じた事のない者がどうして呼び求める事があるか。聞いたことのない者が、どうして信じる事があるか。遣わされなくては、どうして宣べ伝える事があるか?」(ロマ10; 13~15)。イエスはこのような質の言葉を述べ伝える事が自分の使命であると自覚されているのです。だから、ペテロ達がイエスを病人達の所に連れ帰ろうとする時、「近くの間や、村に行こう。そこで私は宣教する。その為に私は出て来たのだから」と言われるのです。イエスはご自分をこの世に属するものではなく、別の所、父なる神の所から来たと自覚される。イエスのこの自覚は父なる神とのまったき交わりから来るのです。父なる神とのまったき交わりは、人間にとって『終末』の事態ですから、イエスは終末から来られた方であるとも言えるのです。しかし、時満ちて『神の支配』がこの世に来たと、いう福音を述べ伝えるのに、イエスは単なる口先の言葉だけではなかったのです。「悪霊」を追い出し、病人を癒すという力ある業をもって、その言葉が「権威ある言葉」である事を示されました。私たちもこの『神の支配の到来を、癒しの時節の到来を待ち望みたいような兄弟姉妹の病気の状況を見て、私たちの出来る限りの範囲で、つまり私たちガ心一つにして、神の国の『愛』に満ち溢れる教会を創りたいと心から皆様も望まれるでしょう

マルコ福音書の二重性縫について (市川喜一師著『マルコ福音書講解Ⅱ 355頁』)
少しスペースが余りましたので、市川師の「イエス伝承」と「ケリュグマ伝承」の二重性についてのご見解を、簡単に説明させていただきます。私も感心して受け取りました。

マルコは復活者キリストの姿を語るのに、地上のイエスの出来事に重ねて語る。福音書は確かに日常のイエスの働きと訓えの言葉を伝えている。それは決して伝記や歴史ではない。地上のイエスの姿に重ねて、復活者キリストを告知する書である。すなわち、『神の子イエス・キリストの福音』を宣べ伝える書なのである。地上のイエスの働きとお言葉は、ペテロを始めとしてイエスの弟子として従った人たちから語り伝えられていた。それは、イエスをキリストと信じた人々に、信仰と生活を導く為に語られたものであった。それが信徒の群れの中で口頭で語り伝えられ保存された。これが『イエス伝承』である。この断片的な『イエス伝承』を素材にして、復活者キリストの福音をマルコが世に告知する文書をはじめて書いた。マルコは、『福音書』と言う類型の文書を創りだした最初の人物である。マルコは福音の展開の歴史において画期的な貢献をしたのである。地上のイエスの姿を語る事によって復活のキリストを告知するという二重性は全体を貫いている。

